

和服改良の軌跡

小林 政子

〔指導教員：武庫川女子大学教授 横川公子〕

キーワード：和服, 和裁, 裁縫, 改良

1. 研究の背景

戦後68年を経た現在、日本人の洋装化は完全に定着し、日本人のライフスタイルに必要な不可欠なものとなった。それに伴う着物離れは顕著であったが、今また祖母や母親の着物を縫い直して着用したい、手軽に習えるのなら和裁を習いたい、という声が聞かれるのも事実である。また現代においても、過去からの贈物である着物のリサイクルは続いている。

こうした動きは、長引く深刻な不況の中で、仕立て直しや仕立替えの出来る着物の良さが見直されて、簡単な作業であれば自分で間に合わせて大切に着用したいという思いの表れではないかと思われる。

2. 本研究の目的

私自身和服を着用する機会があるが、和服の管理と着用に関し時間と手間を要することから、和服改良の可能性を検討しようとする。

明治以降、時代の流れに合わせてさまざまな和服改良が行われてきたが、現在の着物の姿からは劇的な改良の跡というものを見出すことはできない。表面からは見えにくい部分改良や重ね着の減少は別にして、外観は伝統的な和服のままである。現在に至るまでの和服改良の軌跡と、どのような改良が定着してきたかということについて注目する。

3. 調査対象および調査方法

現在までの和服改良について探るため、第1章では明治以降の和服・和裁の裁縫書、第2章では婦人雑誌『婦人画報』、第3章では昭和を代表する着物デザイナーである大塚末子の改良和服を取り上げた。

(1) 第1章の裁縫書に見られる和服改良

『服飾関連図書目録 明治元年～昭和23年』¹⁾の、和服の項目に記載された145冊の文献の内、デジタル化資料の47冊と、武庫川女子大学附属図書館の蔵書検索で、「裁縫」をキーワードに検索の結果、挙げられた文献82冊の内、和裁に関連のある文献43冊（デジタル化資料と重複するものは省く）と、その他3冊の、合計93冊の裁縫書を対象とした。和服改良案の項目をすべて抜き出し、年代順に一覧した。

(2) 第2章の『婦人画報』に見られる和服改良

『婦人画報』の明治・大正期（明治38年7月号～大正15年12月号）と、昭和期（大正16年1月号～昭和19年4月号）の記事を対象とした。記事を通時的に検討し、改良案は和服のパーツに注目した項目に分け、項目毎に頻度順に並べ

て一覧した。

(3) 第3章の大塚末子の改良和服

大塚末子きもの学院の卒業生から借用した、学院で実際に製作した作品である、ワンピースきもの、ツーピースきもの、スリーピースきもの、お末羽織を対象とし、洋服や洋裁と折衷した和服改良の提案を跡づける。

4. 結果および考察

4-1 裁縫書に見られる和服改良の結果

最も早く取り入れられたのは新しい素材の生地であり、改良という文字が最初に現れたのは女袴²⁾であったが、大正初期から頻りに帯の改良が試みられ、名古屋帯が定着していく様子が見られた。日本人の洋装化や洋裁技術の習得により、和洋折衷に近い衣服が生まれた。羊毛や広幅やダブル幅などの西洋服の生地の導入により、それに対応した洋式の縫い方が伝わり、型紙やミシンの使用で時間と手間が省け、曲線裁ちにも対応でき、早く簡単な縫製が可能になった。他には、繰り回しという家事のやりくりの中から自然に生まれた改良や、着崩れ防止や見栄えの良さなど、外観へのこだわりによる改良が見られた。この中で現在まで一般的に定着してきたものは、名古屋帯³⁾、スカート式の下着⁴⁾、じんべえ⁴⁾が挙げられる。

4-2 『婦人画報』に見られる和服改良の結果

婦人雑誌の『婦人画報』では、国防服や標準服応用のように、改良服は日本の時代背景を受けて意図的に考案され提案されていた。和服の項目を頻度順に並べた結果、主に和服のどこに手が加えられたのかということ、生地が最も結果となり、改良を加える際、形態を変えるよりも先に新しい素材の導入の方が取り組みやすい傾向があった。その次に、和服の袖・帯・裾の改良を試みていた。特に袖では、活動しやすさを求めた実用性と、装飾美を求めた外観とのジレンマが生じていたが、和服は外観を重視した結果、現在の形を存続させたと思われる。そして実用性は洋服を着用することで解決した。大正期から「和洋二重生活が一番よい」という声が聞かれたが、実際に和服は和服として、洋服は洋服として、使い分けることとなった。

4-3 大塚末子の改良和服の結果

大塚末子が学院で教えた作品には、次のような共通点があった。①必ず洋服生地を使用すること ②袖に大きな丸みを

もたせるか、斜めにとること ③着用時の姿は和服に見えること ④名称、縫い方(型紙・ミシンの使用)、構成、衿部分など、取り入れられる箇所にはできるだけ洋服の手法を取り入れたこと 洋服生地の使用は和服を家庭で管理するためであり、袖の丸みなどは動きやすさを追求した結果であり、縫い方はやはり家庭で製作するためであり、大塚末子が目指したものは、自分で製作・管理・着用が可能な、活動的な「和服の普段着」であった。

5. 結論

明治以降、様々な和服改良が行われてきたが、第1章から第3章にかけて共通していた点に、新しい素材を取り込んでいく様子が見られた。形態を変える前にまず生地を変えることの方が、容易に取り組むことができたといえる。

裁縫書と『婦人画報』に共通する改良案は、帯に関するものが顕著に見られ、着用者に特に不便を感じられ、改良の余地がある箇所として関心を持たれていた。改良案は主に、細く、小さく、短く、かさばりを減らすという意見だった。

裁縫書と『婦人画報』の相違点は、やはり『婦人画報』の方が日本の社会情勢を色濃く表していた点である。また、裁縫書には家事のやりくりの中で自然に生まれた腹合せ帯のように、自然発生的な改良が記されていたことに対し、『婦人画報』では、目的とするテーマに基づいて意図的に考案された改良案が発信されていた。

和洋折衷案は多く見られてきたが、その中でも特に、大塚末子の改良和服は洋服の良さを最大限に取り入れたものだった。戦後、ある程度は認められながらも明確には定着しなかった理由については、以下の要素が考えられる。①総柄の洋服生地では表現が限られてくること ②上着の丈に若干の流行があり、現在の感覚からは短く感じる事 ③背縫いや衿の省略により、着装の際目安になる線がなく不便なこと ④縫いやすさの感覚は、和裁と洋裁のどちらに慣れているかによって人それぞれであったこと ⑤高度経済成長という状況下で、高級品としての和服に価値が求められるようになったこと。

数々の改良案の中で、どのような改良案が定着してきたのかというと、裁縫書では名古屋帯、スカート式の下着、じんべえが挙げられる。『婦人画報』では、生活様式に関する指摘で「和服と洋服が二本立てとなるような状態が最もよい」という意見があり、現在和服は和服として、洋服は洋服として着用されているという点で、この案は定着したといえる。また、上下に分かれた二部式の着物や、作り帯も、一部の使用者に定着している。スカート式の下着など、表面から見えにくいものは手を加えやすかったと思われ、表面によく現れる名古屋帯や作り帯は、着装の過程が簡略化されながらも、着姿は帯の形を保ったものとなっている。以上のように、着装が簡略化されながらも、和服としての装飾性を残すものが、より定着する傾向が見られた。

注及び参考文献

- 1) 高橋晴子、大丸弘：服飾関連図書目録 明治元年～昭和 23 年、紀伊國屋書店、1995
 - 2) 渡辺滋：渡辺式改良女袴製作法、東京裁縫女学校、1913
 - 3) 鹽原千代子：鹽原式裁縫書、神戸女子高等技芸学校裁縫研究部、1925
 - 4) 主婦の友社：和裁裁縫(夏物)家庭講座 第六輯、主婦の友社、1949
 - 5) 大塚尚人：大塚末子・人と仕事(大塚末子生誕百周年記念出版)、大塚学院、2003
- ・奥村萬亀子：京に「服飾」を読む、染織と生活社、1998
 - ・牛込ちる：被服教育の変遷と発達、家政教育社、1971
 - ・田中初夫、田中ちた子：家政学文献集成續編 明治期V、1971



図1 大塚末子考案お末羽織(型紙・ミシン使用 リバーシブル)



図2 刺し子を施した大塚末子の作品⁵⁾